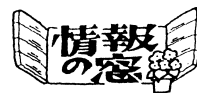


「未来を担う若手研究者のつどい@つくば」の 10年間とこれから



吉瀬 章子 (筑波大学システム情報系)

1. はじめに

例年5月あるいは6月の土日の2日間、筑波大学において「未来を担う若手研究者のつどい@つくば」という合宿形式の研究集会を行っています。2001年に参加者62名で始まったこの研究集会も、多くの皆様のお力添えのお蔭で、今年は150名を上回る方々にご参加いただくことができました。本稿では、この研究集会の10年間で簡単に振り返ってみたいと思います。

本研究集会のそもそもの発端は、SSORの繰越金をどのように活用するかという問題でした。SSORとは、1998年までに33回開催された、オペレーションズ・リサーチ分野における若手研究者の研究・人材交流支援を目的とする合宿形式の夏季セミナーです¹。SSORを通じて数多くの学生が友好と知識を深めることができたのですが、年々運営が難しいという声がかかるようになり、惜しまれつつも33回で幕を閉じました。本研究集会の第1回は、このSSORの繰越金の一部を活用して、数理最適化の研究を行っている若手研究者の研究交流の場として開催されました。

初回の運営は「最適化とアルゴリズム」研究部会(主査:田村明久先生,幹事:塩浦昭義先生)から申し送りを受けた「アルゴリズムと最適化」研究部会の主査・幹事が行いました。以来、現在に至るまで、参加される学生の皆さんの宿泊場所や会場の準備は筑波大学のスタッフが代行し、表1にある研究部会の主査・幹事がプログラムの作成を担当する、両輪体制で運営を行っています。

過去の研究集会における発表内容については、以下の各研究部会のホームページをご参照ください(2012年10月5日確認)。

<http://www.me.sophia.ac.jp/~y-miyamo/saor/>

¹ 詳しくはオペレーションズ・リサーチ学会50周年記念事業として開催されたSSOR2007 (<http://open.shonan.bunkyo.ac.jp/ssor/>) (2012年10月12日確認)をご参照ください。

表1 プログラム作成を担当した研究部会

部会名	期間	主査・幹事(敬称略)
アルゴリズムと最適化(SAOP)	2001.04-2003.03	久野誉人・吉瀬章子
アルゴリズム(SAOR)	2003.04-2006.03	岩田覚・武田朗子・宮本裕一郎
計算と最適化(S@CO)	2006.04-2009.02	村松正和・森口聡子
計算と最適化の新展開(SCOPE)	2009.03-2012.02	藤澤克樹・後藤順哉
最適化の理論と応用(SOTA)	2012.04-	牧野和久・小林佑輔

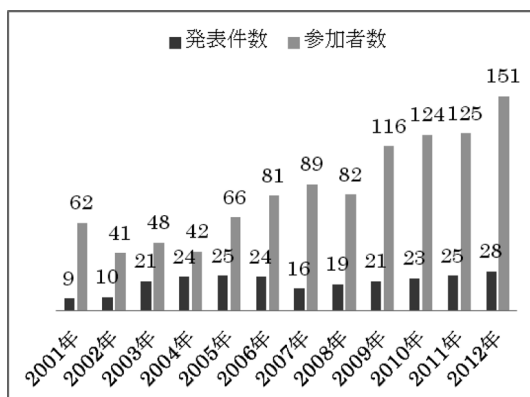


図1 発表件数と参加者数の推移

<http://www.me.sophia.ac.jp/~s-morigu/s@co/>
<http://www.indsys.chuo-u.ac.jp/~jgoto/SCOPE/>
<http://www.misojiro.t.u-tokyo.ac.jp/~y-koba/SOTA/>
 図1は各研究部会の幹事の方からいただいた情報と、筆者の手元にある資料から抜き出した、各年の発表件数と参加者数の推移です。2003年から2005年までの参加者数については、実際はもう少し多かった可能性はあるのですが、着実に参加者数が増加する傾向にあることがわかります。以下では数枚の写真とともに、この研究集会の進化の様子を紹介します。



写真1 山本芳嗣先生による特別講演の様子



写真2 2005年の主査の岩田覚先生の自己紹介

2. 高速バスからつくばエクスプレスへ

今から思えばなんと不便な会場で開催していたものか、当時ご参加いただいた方々には、ただただ感謝の言葉しか見つかりませんが、2005年8月につくばエクスプレスが開通するまで、筑波大学には常磐線か、あるいはつくばセンター止まりの高速バス²を利用するほかはありませんでした。このような状況にもかかわらず、「アルゴリズム」研究部会（主査：岩田覚先生、幹事：武田朗子先生、宮本裕一郎先生）がプログラムを担当された2005年も、60名以上の皆様にご参加いただくことができました。

写真1はこの年に行われた山本芳嗣先生による特別講演の様子です（発表題目「相互評価の下での社会的厚生関数と社会的選択関数についての不可能性定理」）。当時の会場は、つくばセンターからバスで10分程度の場所にある、定員100名の講義室でした。

開催当初から、初日の夕方に行く懇親会は、この研究集会の（最も）重要なイベントです。現在では懇親会の出席者数も非常に多いため、昔のSSORのように大学・研究機関・企業ごとに自己紹介を行っていますが、2005年当時は60名ほどであったため（それでも1時間以上かかりますが）、学生を含め、1人ずつ自己紹介を行っていました。

写真2, 3はこの自己紹介の様子です。60名といえども相当な人数なので、会場の中央に座っている参加者は、他の参加者に顔を覚えてもらうために、クルッと1回転する必要があります。写真3は会場の隅に座っていたにもかかわらず、1回転している本誌編集長の松井知己先生です。

また現在はつくば駅近の会場で開催しているため、



写真3 回転中の松井知己本誌編集長



写真4 弁当を食す久野誉人先生と久保幹雄先生

昼食などもあまり困らないのですが、当時は飲食店から遠く、頼みの学食も休日は閉店している中地区キャンパスで開催していたため、写真4のようにお弁当を注文して販売しました。

こうして書けば書くほど、当時の不便さを改めて痛感します。そのような悪条件にもかかわらず、遠路をおいでくださった方々に謹んでお礼を申し上げます。2005年8月に、長きにわたる紆余曲折ののちようやく開通した「つくばエクスプレス」のお陰で、交通の悪条件はかなり改善されました。

² 現在では大学構内まで運行されています。

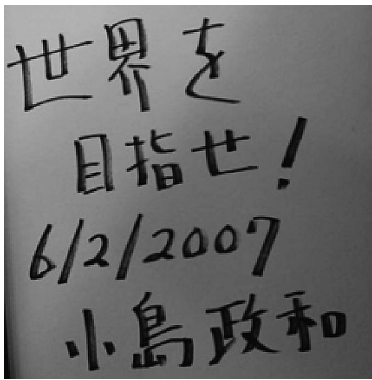


写真5 2007年優秀発表賞受賞者の副賞

3. 2007年から「発表賞」を創設

「計算と最適化 (S@CO)」研究部会 (主査: 村松正和先生, 幹事: 森口聡子先生) がプログラムを担当された2007年より, 「発表賞」が創設されました。以来現在に至るまで, 2~5件の優秀発表賞と, 1~2件の最優秀発表賞を授与しています。

受賞者には, 賞状と, 副賞として特別講演の講演者による色紙をお渡ししています。2007年の特別講演は, 茨木俊秀先生 (発表題目「私の研究生活から—NP困難性との出会い—」) と小島政和先生 (発表題目「35年を振り返って—研究者は何を目指すか—」) で, 写真5はこの年に優秀発表賞を受賞した当時筑波大学修士2年生の流王智子氏 (現鉄道総合研究所) に贈られた色紙です。

実は現在, この色紙は筑波大学のとある学生研究室に飾られています。この副賞の発案者でありながら色紙をみて思わず「いいなあ」とつぶやいた某筑波大教員の姿を見て, 心優しい流王氏が「これは研究室に飾りましょう」と言って残していつてくれたものです。小島政和先生の東京工業大学のご退職記念の際にも, 参加された皆様への記念品に, この色紙の写真を使わせていただきました。

4. 参加者数が100名を超えて

図1のグラフからもおわかりのとおり, 2009年には参加者数が100名を超えてしまいました。それまでの定員100名の講義室ではあまりに手狭になってしまったため, 2010年からは, つくば駅から徒歩6分の場所にある, 筑波大学春日講堂 (定員200名, 写真6) で開催しています。

駅に近く広々とした便利な会場なのですが, 研究室



写真6 2010年より筑波大学春日講堂で開催



写真7 2010年に使用した道案内の看板



写真8 2012年の会場の様子

からは遠く, また機材の取り扱いが複雑であるなど, 準備には結構手間がかかります。しかしちょうどその前年の2009年3月, 同じ会場で本学会の春季研究発表会を開催していた経験が大きく役立ちました。同発表会では筑波大学の学生アルバイトが数多くの作業を行ったのですが, 彼らはその手順をきっちりと覚えてくれていました。写真7にあるような看板や名札の準備, 受付や会場の準備, さらには写真撮影に至るまで, すべて学生スタッフが自主的に準備をしてくれていま

す。本研究集会の運営を支えている優秀な学生スタッフ、特に彼らを束ねてくれた(ている)高野祐一氏(現東京工業大学)、高橋里司氏に謝意を表します。

そして2012年の今年、参加者はついに150名を超えました。写真8からもおわかりのように、200名定員の会場でさえ徐々に狭くなりつつあります。このように年々参加者が増えているのは、本研究集会のプログラムを作成してくださる各研究部会の主査・幹事の皆様、発表してくださる若手研究者の皆様、お忙しいなか特別講演をお引き受けくださる先達の先生方の並々ならないご協力のお蔭です。改めて関係者の皆様、またこれまで参加して下さった多くの皆様に、心よりお礼を申し上げて本研究集会の紹介を終えたいと思います。

5. おわりに

本稿では、2001年より筑波大学において開催している「未来を担う若手研究者のつどい@つくば」研究会のこれまでを紹介させていただきました。

皆様のお力添えで年々参加者が増えている研究会ですが、まだまだ可能性は残されていると考えています。

その1つは、発表テーマの拡充です。これまでも「都市のOR」研究グループの皆様にご発表いただくなど、必ずしも数理最適化一辺倒ではないのですが、

テーマの中心が同分野であることは間違いありません。本研究集会がもともと、OR分野全般にわたる若手研究者を対象としたSSORに由来することを考えますと、関西で活発に活動が続いている「OR横断若手の会(KSMAP)」³のように、さらに幅広い研究者の方々にご参加いただくことも視野に入れるべきなのかもしれません。こうした可能性も考慮しながら、来年もこれまで以上に多くの皆様にご参加いただけることを祈りつつ、本研究集会の運営に携わりたいと考えております。

なお本原稿の草稿を読んでいただいた、ある歴代幹事の先生より、「『若手研究者の会』の紹介なのに、本原稿の写真に写っている人たちが『若手』っぽくない」とのご指摘をいただきました。確かに一見そうなのですが、「計算と最適化(S@CO)」研究部会のホームページ⁴に明記されているように、本研究集会では「『若手研究者』とは、自分で『若手』だと認識している人のこと」と定義されており、この意味で大きな矛盾はないと思っています。

最後になりましたが、本研究集会の開催にあたり、筑波大学大学院システム情報工学研究科社会システム・マネジメント専攻よりご支援をいただいております。また本稿の執筆にあり、歴代の研究部会の主査・幹事の先生方より大変に有益なアドバイスをいただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

³ 詳しくはKSMAPのホームページ(<http://www-or.amp.i.kyoto-u.ac.jp/ksmap/>) (2012年10月12日確認)をご参照ください。

⁴ 詳しくは以下のURLをご参照ください。
<http://www.me.sophia.ac.jp/~s-morigu/s@co/mirai06/mirai.html> (2012年10月12日確認)